

「アブラハムへの約束」（創世記一五章一〜二二節）

1 幻の中で

アブラハムの生涯、その信仰の歩みを、創世記によって辿っています。創世記第二章からはじめています。

先週まで私どもは、一二章から一四章まで、三つの章を見てきました。カルデアのウル、更にユーフラテス河畔の町ハラシからの旅立ち、飢饉のさいエジプトに避難したこと、カナン地方での、甥ロト救出のための諸王との戦いなど、七五歳になった人間とは思えない、壮年のような、力に溢れたアブラハムを、簡潔な記述の中に、見えてきたわけです。

今日の聖書箇所は一転して、きわめて内省的なアブラハムの姿を私どもに伝えていきます。神の召しにより故郷を後にし、約束の地カナンに、ともかくも、ようやくにして自分の居場所を定めることができたということが、こうした自分と向き合う、自分のことを深く省みる、そうした時間をもたらすことになったのでしようし、またそれは彼には必要なことでした。

自分のことを考えるということは、アブラハムにおいては、神と向き合うことにはないことです。神の言葉に照らされて、自分が見えてくる、ということですから、神が、神のほうから、アブラハムに出会ってくださった、語ってくださったのです。

今日の箇所では、なるほど、たとえば、神は「幻の中で」（一節）語っておられますし、アブラハムが「深い眠りに襲われ」、恐ろしい「暗黒」（一二節）に覆われたときに語っています。幻がどんなものか、暗黒に覆われるとはどんなことか、はっきり分かりませんが、神が出会ってくださった、アブラハムの心の奥深く、人には見えないところで出会って下さった、それは確かなことです。

もちろん私どもはだれもアブラハムではありませんし、だれもアブラハムという人のとてつもない大きさに比べることはできませんけれど、活動的なアブラハムと内省的なアブラハムがいて、活動的なアブラハムは内省的なアブラハムに支えられているという事情は、私どもにおいても同じです。ですから、私どものだれにとつても、ときに立ち止まって、自分の在り方や自分の来し方、行く末を考えてみる、聖書と共に神の前で考えてみることは、若いとか年を取っているとかに関係なく大切なことだと思います。

じつさい今日の聖書箇所では、この内省的な時間に、神と語り合うその中で、アブラハムは決定的な言葉を見いだしたのです。彼の人生をこれまでも支えてきたし、これからも支えていくであろう決定的な言葉、それを見いだした。いやむしろ、それを与えられた。その言葉とは六節です。

アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた（六節）。

アブラハムは主なる神を信じた、そのことが神によって義と見なされた、これがアブラハムの人生の土台となったのです。

この聖句は、ご承知のように、新約聖書で、使徒パウロによってくり返し引用されて、パウロの、したがって私もキリスト者の信仰理解の基本とされてきたことは言うまでもありません。信仰による義です。パウロは例えばこう言っています。ローマの信徒への手紙第四章から一つ引用します。

もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。聖書に何と書いてありますか。「アブラムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」(二〜三節)。

ここでパウロは、人は信仰によって義とされるのであって、行いによってではないという意味で信仰による義に言及しています。そのほかに、アブラハムの信仰が義と認められたのは、彼が割礼を受ける前であった、だから信仰による救いは、割礼のあるなしには関わりがない、つまり、割礼のあるユダヤ人にも、ない異邦人にも、すべての人に等しくこの救いは差し出されているのだ、それを言うためにも創世記のこの箇所を使っています。

要するに、アブラハムは信仰者の父だというわけです。アブラハムの信仰、それが私どもの耳を傾けるべき事柄です。

2 信仰による義

創世記を、ここまで、一二、一三、一四章と読んできて、アブラハムが抱えていた問題、彼にとつてもっとも気がかりな問題が何であったか、大体のところは、お分かれることと思います。

そうです。子どもが与えられないことです。あなたは「祝福の源」となる、あなたを「祝福の基とする」と神にくり返し言われてきたアブラハムです。カナンに入ってから、「あなたの子孫にこの土地を与える」と言われます。でも、祝福を担いつづけるべき、土地を所有するはずの、その肝心の子供が、アブラハムと妻サラとの間に生まれないということであったのです。聖書はそのことを早くから示唆して「サライは不妊で、子どもがなかった」(一一・三〇)とあったのを、皆さんも覚えておられると思います。アブラハムも、それはよく知っていたのです。

カナンの各地をめぐる、忙しくしていた間は、それは、あるいは忘れていられたかも知れませんが。しかし事態は何も変わっていないのです。主なる神が、幻の中で、「恐れるな」と呼びかけ、「報い」(神の賜物)大きいぞ言っても、アブラハムの反応は冷やかかで、懐疑的、嘆きと絶望に近いものがありました。

アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子どもがありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです」。アブラムは言葉をついだ。「ご覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんか。家の僕が跡を継ぐことになっています」(二〜三節)。

今日の聖書箇所、第一五章の書き出しは、「これらのことの後で」(一節)となっています。前の章の出来事、甥のロトを救い出した、戦いの勝利の気分がなお続いて

いたと言わんばかりです。しかしそうでしょか。ここにあるアブラハムの問いからは勝利の余韻を感じるどころか、人生に幻滅し、将来について悲観している人の気分がただよってきます(ギブソン)。

それもこれも、すべては、アブラハムにとって、神が子孫を与えてくれないというところに帰着するのです。百七十五年生きたアブラハムの七五〜八五歳、十年の歳月のことでした。

ここにエリエゼルという名前の人が出ています。詳しいことは分かりませんが、アブラハムの家で生まれた奴隷です。

家督を継ぐ者として出てきます。ただ奴隷が家督を継ぐことがあるのか、疑問視する向きもあったようです。考古学の研究などから、そうしたことはあったと証明されています。義理の父と母をきちんと見送るといのが、その場合前提です。当時の習慣にもとづいて手当をしておくことは、アブラハムにとって、当然のことと思われたのではないでしょうか。

イサクが生まれるという結末を私どもは知ってしまったので、どうしてこんなにもじらすのか、そんな気もしないではありません。アブラハムは試されているのでしょうか、鍛えられているのでしょうか。神を信じる、神に信頼するために。そうとしか言えないようにも見えます。

いずれにしても、主なる神は、「あなたから生まれる者」が、あなたの実の子が「跡を継ぐ」と言明し、その上でアブラハムを外に連れ出してこう言ったとあります。

「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい」。そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる」(五節)。

ここに伝えられている光景は、「幻の中で」の光景は、まことに美しいものがあります。

アブラハムが感じ取ったことを、想像することが許されるとしたら、第一に、自らの小ささを思わないわけにはいかなかったのではないでしょうか。この天と、そこに輝く星々をおつくりになったのは主なる神です。しかも何もないところから。彼はその神の無窮の力を思わない訳にはいかないのです。そしてそのとき「アブラムは主を信じた」。族長としての彼の働きを神がつねに支えて下さった、それは間違いないことです。しかし彼はただ一つのこと神に失望し、疑い、諦めの中に置かれていたのです。その中でしかし、にもかかわらず、アブラハムはなお神を信じ、すべてを神にお任せします。これがアブラハムの信仰です。神がよしと見なしてくださった信仰なのです。

3 契約

祝福の担い手としての子孫については、こうしてアブラハムは、神にお任せしたのです。もう一つ、土地の取得についてはどうなったのでしょうか。今日の聖書の後半はその問題に当てられます。

主は言われた。「わたしはあなたをカルデアのウルから導き出した主である。わたしはあなたにこの土地を与え、それを継がせる」。

アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。この土地をわたしが継ぐことを何によって
知ることができましようか」(七〜八節)。

ここもまだ幻の中でのことです。神の約束は、むろん変わりません。それをアブラ
ハムも疑っていません。しかし彼はここで「何によって知ることができるか」と、し
るしを求めています。

この箇所、九節以下に書いてあることは、少し分かりにくいので、私の言葉で簡単
に説明しておきます。

ここに書いてあるのは、当時、ときになされていた「誓い」あるいは「呪い」の方
法のようなです。動物が使われます。神に促されて、アブラハムは、三歳の雌牛と三歳
の雌山羊と三歳の雄羊、それに山鳩と鳩の雛を用意します。鳥は除いて、三頭の動物
を、真つ二つに切り裂いて、それぞれ向かい合わせておきます。イスラエルの習慣で
は、何かを誓う場合、誓う人は、この引き裂かれた動物の間を通って行くのです。そ
してもし約束を破るようなことがあれば、これらの動物のように、自分が引き裂かれ
呪われてかまわないということを表します(エレミヤ三四章)。ここでその動物の間
を通って行ったのはだれ、あるいは何であったのでしょうか。

日が沈み、暗やみに覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂か
れた動物の間を通り過ぎた。その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。「あ
なたの子孫にこの土地を与える・・・」(一七〜一八節)。

「煙を吐く炉と燃える松明が」、二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた、とありま
すが、つまり神が通り過ぎたのです。こうして神は、ご自分のなした約束、その言葉
にどこまでも忠実であると自ら誓われたのです。

それを明らかにした「その日」、神はアブラハムと契約を結んだとあります。それ
はアブラハムと深い関係に入った、特別な関係に入ったという意味です。聖書の契約
の特色は、その関係が神の恵みによることです。契約に反することは神は何一つなさ
ることはないということです。「あなたの子孫にこの土地を与える」と、そうした保
証のもとで語られます。

さて、この第一章、アブラハムの生涯では非常に重要なことが語られていたよう
に思います。疑うことから信頼することへ、自分の力から神の力へと、アブラハムは
導かれます。そして神との契約、すなわち、神との恵みの関係にアブラハムは生きは
じめます。神はこの契約にどこまでも忠実です。ルカによる福音書に「主は我らの先
祖を憐れみ、その聖なる契約を覚えていてくださる」(一・七二)とあります。契約
を覚えていて下さった、それがイエス・キリスト誕生の意味でもありました。アブラ
ハムとの契約に忠実な神は、私どもとの契約を、イエス・キリストの十字架の血によ
る罪の赦しの契約を、神は忘れることはありません(マタイ二六・二八、ヘブライ一
二・二四)。私どもを、神の民として、「ひとみ」(詩一七・八)のように守ってく
ださる神、それがアブラハムの神なのです。